④首都圏の公立中高一貫校の今年の［入口」＆「出口」はどうだった？

「入口」、「出口」って何のこと？と思われた方もいらっしゃると思います。受験の世界では、入試状況を「入口」、進路状況を「出口」と表現します。一種の業界用語です。今回は、愛知にできる公立中高一貫校がどうなるかの参考に、東京を例に公立中高一貫校の入試状況と大学合格実績を見てみましょう。

都内 11 校中 9 校が出願者減

■2024 年度、東京は 4 倍近くにまで低下

2024 年度の都内の公立一貫校では、これまでにないほど大きく出願者数が減少しました。まず学校別入試結果を表にしてみましょう。

学校名	定員	応募者数（昨年）		倍率
小石川中等教育学校	男女 155※	684（745）	－61	4.41
白鴎高等学校附属中学校	男女 164※	688（746）	－58	4.20
両国高等学校附属中学校	男子 80　女子 80	700（775）	－75	4.38
桜修館中等教育学校	男子 80　女子 80	705（864）	－159	4.41
富士高等学校附属中学校	男子 80　女子 80	566（574）	－8	3.54
大泉高等学校附属中学校	男子 80　女子 80	667（734）	－67	4.17
南多摩中等教育学校	男子 80　女子 80	596（662）	－66	3.73
立川国際中等教育学校	男子 65　女子 65	529（494）	＋35	4.07
武蔵高等学校附属中学校	男子 80　女子 80	421（471）	－50	2.63
三鷹中等教育学校	男子 80　女子 80	769（924）	－155	4.81
都立合計	男子 788 女子 788	6,325（6,989）	－664	4.03
千代田区立九段中等教育学校 （区分B＝千代田区民以外の都民）	男女 80	433（407）	＋26	5.41

※小石川中等は全国科学コンクール個人の部で入賞した者を対象とする特別枠を除いた人数。白鴎高校附属は囲碁・将棋、邦楽、邦舞・演劇の分野に継続して取り組み、上級の資格や卓越した能力がある者を対象とした特別枠を除いた人数。都立中高一貫校がスタートした直後からこの２校には特別な才能を有した生徒を入れるためのこのような「特別枠」があります。が、毎年該当者は少なく、他校には広がっていません。

千代田区立九段中等を除く都立 10 校全体では 2023 年の 6,989 名から 6,325 名へと 664 名も減少しました。次は他県の状況です。

東京以外でも 12 校中 9 校が出願者減

東京以外の神奈川、千葉、埼玉についても学校別入試結果を表にしてみましょう。

学校名	応募者数		倍率
神奈川県立相模原中等教育学校	880	－102	6.14
神奈川県立平塚中等教育学校	683	－54	4.27
横浜市立南高校附属中学校	690	－175	4.31
横浜市立横浜ＳＦ＊高校附属中学校	450	－17	5.63
川崎市立川崎高校附属中学校	493	－95	4.11
千葉県立千葉中学校	550	－20	6.88
千葉県立東葛飾中学校	762	－31	9.53
千葉市立稲毛国際中等教育学校	747	－104	4.67
埼玉県立伊奈学園中学校	400	+19	5.00
さいたま市立浦和中学校	659	+35	8.24
さいたま市立大宮国際中等教育学校	730	＋46	4.56
川口市立高校附属中学校	365	－53	4.56

＊横浜ＳＦ高校附属の SF は「サイエンスフロンティア」です。

東京以外でも埼玉の 3 校を除くといずれも減少していることがわかります。つまり今年度の公立中高一貫校は全般的に出願者数の減少が目立ちました。

倍率低下の理由は？

年々倍率が低下することは全国的な傾向ですが、その理由をわかりやすく都立中高一貫校を例に考えてみましょう。

2010 年度に今の 10 校体制になった都立中高一貫校は、当時の平均倍率が 7.14 倍にも達しました。それが 2024 年度の 4.03 倍まで徐々に低下しています。その理由としては次のことが挙げられます。

●学習指導要領の範囲内からの出題ということで、当初はダメもとで大勢が出願した（地元の小学校の 6 年生全員が出願したというケースも）。
●小学校の勉強ができるくらいではとうてい合格しないことがわかった。
●親が知らない「適性検査」なので、家では指導がしにくい。
●塾に通って対策しなければ合格可能性は低い。
●公立中高一貫校は同一入試日なので対策しても 1 校しか受検できない。
●努力しても高倍率なので合格する可能性が低い。

このように、いわばコストパフォーマンスが低いことから徐々に低下してきているのです。

愛知でも初年度はかなりな高倍率になることが考えられますが、徐々に低下していくと思われます。

受検者は女子のほうが多い

公立中高一貫校の受検者は女子のほうが多いことがふつうです。2024 年度の都内 11 校では、武蔵高等学校附属と両国高等学校附属のみ男子のほうが多く、9 校は女子のほうが多くなっています（例年は小石川中等も男子のほうが多いのですが、今年度は珍しく女子が多くなりました）。他の 3 県でも男子のほうが多いのは千葉県立千葉と千葉県立東葛飾だけです。入学難度の高い学校ほど男子が多くなる傾向があります。概して女子のほうが多い理由としては、

１、小学校の報告書の成績(5 年と 6 年）を合否判定の資料に用いる（九段中等は 4 年も）
２、適性検査に読解や記述など女子の得意な内容が多い

ことが挙げられます。

愛知は記述式でなく選択式なので、首都圏のように女子が多くなることはないかもしれません。男子も積極的にチャレンジすることをお勧めします。

公立中高一貫校の大学合格実績は極めて良好

次に出口、大学合格実績についてお話ししましょう。都内 11 校のこの春の難関大学の合格実績を例にとってみます。

学校名	東大	東工大	一橋大	早稲田大	慶應義塾大	上智大	東京理科大
小石川	16	7	4	58	26	36	58
南多摩	11	5	5	47	13	13	23
両国 ○	6	2	0	36	13	14	37
桜修館	5	5	10	70	42	42	34
大泉 ○	5	2	4	40	17	20	40
立川国際	5	2	4	31	16	33	19
武蔵 ○	5	7	6	46	25	24	30
白鴎 ○	3	1	2	29	13	21	14
富士 ○	3	3	1	37	13	13	24
三鷹	2	3	1	41	24	26	30
九段	1	3	1	29	9	8	17

※○印は併設型（高校でも募集）、無印は高校募集のない中等教育学校を表す

ちなみに愛知はすべて高校募集のほうが多い併設型です。東京の併設型は 2021 年度入試から徐々に高校募集を閉じてきて、2022 年度の白鷗高等学校附属を最後に高校募集をしなくなりました。ただ校名は○○高等学校附属のままにしています。

表を見て、お気づきのことがあると思います。

●公立中高一貫校でも学校差が大きい。
●都立 10 校を比較すると、中等教育学校のほうが併設型よりも上回っている。全員が 6 年一貫教育であることで、カリキュラムが一本化され、かつ先取りも可能なので実績が出やすい。
●都内の公立中高一貫校すべての学校から東大合格者が出ている。

このように公立中高一貫校は大学合格実績において極めて優れているのです。ただ愛知の場合は併設型で、しかも高校からの入学生のほうが多いので、先取り学習については未知数です。

公立中高一貫校は総合型、学校推薦型に強い

保護者の方の大学入試のイメージはほぼイコール一般入試（今は「一般選抜」と言います）ではないでしょうか。しかし、現在では私立大学を含めると入学者の半数以上を「年内入試」と言われる「総合型選抜」「学校推薦型選抜」で占めています。

「年内入試」の多くは以前の AO 入試のような入試ですが、難関国立大学のそれは極めて高度な学力・資質・志を求めるものです。ここでは公立中高一貫校からどのくらい東京大、東工大、一橋大の「総合型選抜」「学校推薦型選抜」に合格しているか、見てみましょう。

大学名	公立中高一貫校名
東京大	桜修館２、大泉、小石川、白鷗、武蔵
東工大	桜修館２、九段２、大泉、小石川
一橋大	桜修館、小石川、武蔵

都内 11 校のうち 6 校から合格者が出ていることがわかります。特に桜修館、小石川がすばらしいです。6 年間の探究学習で、あるテーマについて深く体系的に勉強をしてきたことがこうした選抜に向いているのです。

今度開校する愛知の 4 校はいずれも探究学習に力を入れているので、大いに期待できるのではないでしょうか。

先に見てきたように公立中高一貫校のこの春の出願者数は減りました。それは受検生が絞られたからであって、入試難度が下がったわけではありません。大学合格実績からもわかるように 6 年一貫教育にはそれ自体の優位性があるのです。

首都圏から見ていると、愛知では「名門高校に無試験で入れる」といった報道がなされたりしていますが、そこがポイントではなく、6 年一貫教育の中身に注目して受検していただきたいと思います。